

Title	ジョン・サヴィル編 ドナ・トール女史記念論文集 民主主義と労働運動
Sub Title	Democracy and the labour movement
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1956
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.49, No.11 (1956. 11) ,p.821(57)- 826(62)
JaLC DOI	10.14991/001.19561101-0057
Abstract	
Notes	書評及び紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19561101-0057

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

楠井氏は、コッジオレクが言うように、「生産的・非生産的の對決は一般的・抽象的なものではなく、歴史的に規定される」のだから、社會主義經濟では社會的に有用且つ必要労働は、生産的労働であるかまたはこの生産的労働のために必要または有用である故に間接的に生産的労働であるかのいづれかであり、したがつて物質的生産という點から分けることはできないのではないかと疑問をたされる。私も述べたことがあるように、この意見に賛成であり、野々村氏のように、物質的生産に役立つ、サーヴィス労働は生産的であるという如き分け方には同意できない。もし概念によつて明確な區別ができないとすれば、更によりき用具を作りだすことこそ必要なのではないか。資本主義の分析にとつてよりき用具であつた、マルクスの生産的の考へ方は、社會主義に妥當できるものであろうか。ここに第一次所得と派生的所得という總社會的區別が考えられるが、この方法とマルクス理論とをどう統一できるのか私には納得できない。

第二の點。社會的總生産物を一年間に生産された總價值とみる考へ方が一般的であるが、ポールが生産手段に價值のない社會主義ではこの考へ方は誤つていと述べたことは既に紹介した。これに對して名島氏は價值のない生産手段をいかにして價值で測定できるのかという疑問を述べられる。これについて野々村氏は、「ポールのいうように生産手段が價值をもたないとしても、現在のソヴェト社會においては、物財の計測もそして計畫化もまたすべて労働時間によらない。それは消費資料と同じ次元において貨幣的な計算をうける」としておられるが、これでは問題は解決していない。原價論争の重要な所以である。

昭和三十一年九月

三田學會雜誌 第四十九卷第十號

目次

論 說	
現代財政學に對する若干の疑問	高木壽一
一つの覺書	
労働供給に關する覺書	辻村江太郎
『保險と價值形成の問題』について	庭田範秋
所得税と消費税の厚生効果	古田精司
書評及び紹介	
J. A. C. ブラウン著『産業の社會心理』	中鉢正美
工場における人間關係	
サコフ『社會主義經濟的カテゴリーとしての原價』	加藤寛
經濟史發展の現段階	渡邊國廣
物價史の研究について	渡邊國廣
經濟學關係文献目錄	

書評及び紹介

ジョン・サヴィル編

ドナ・トール女史記念論文集

『民主主義と労働運動』

Democracy and the Labour Movement,

Essays in Honour of Dona Torr, 1954.

一

イギリスにおける労働運動史や社會史の研究の現状がどうなつていくかについて、われわれは今迄充分知る機會に恵まれなかつた。世界の學界の片隅にあつて、現在の社會科學の中心的な課題となつていくものが何であるかを知るために、われわれは、續々と刊行される海外の出版物を、ひたすらたんに眼をとおしながら、わずかにその動向をさぐりあてるのが精々である。しかしながらそれさえ満足にできないというのが現實である。およそ學問というものを大切にしないこの國に生れた不幸は、内外のあらゆるすぐれた著作を、ゆつくりと讀ませてくれる餘裕を、經濟的にも時間的にもあたえてはくれない。日本の學者たち——とりわけ社會科學者たち——が、みづからその獨創的な學問的體系を形成するよりは、海外の文献の應接に暇ない状態をみると、とくにこのことを深く感ず

書評及び紹介

五七 (八二一)

るのであつて、かく云うわたくし自身も、その例外でないことは云う迄もない。

ところで、最近のイギリスにおける労働運動史および社會史の研究にかんする水準を示すものとして、この『民主主義と労働運動』はもつとも注目すべきもののひとつではなからうか。これはジョン・サヴィルの編集によつて、ドナ・トール女史が、一九五三年七十歳を迎えた記念として、彼女の教えをうけた人々や、或いは日頃彼女を尊敬している人々によつて書かれた論文集であるが、執筆者の多くは、現在學界に活潑な活動をつづけている進歩的な學者たちで、多くはオックスフォードやケンブリッジ、或はグラスゴーやハルなどの大學のフェローやチューターをつとめている比較的若い世代に屬する俊秀であると思われる。

本書の紹介に入るまえに、ドナ・トール女史について、その序文ののべることを記しておこう。彼女は、一九二〇年、三十七歳のとき、イギリス共產黨の建設に参加した黨員であるというから、その政治活動の歴史はきわめて古いわけである。だが彼女は、ただ運動家として活躍してきただけでなく、また民主主義運動や労働運動の歴史にかんする研究者として知られている。すなわち彼女は、マルクスとエンゲルスの往復書簡を翻譯し編集したり、「マルクス主義、國民および戦争」という題目で、マルクス主義の古典的文献からの抜萃を編さんしたりすると同時に、今その畢生の大著となるべき『トム・マンの生涯』(The Life of Tom Mann, 2 Vols)を完成すべく努力しているといわれ、その公刊が期待される。この書の序文が、ジョージ・トムソン、モリス・ドップ、クリストファ

「ヒルおよびジョン・サヴィルの名でかかげられているところをみても、現代イギリスのマルクス主義經濟學者や思想家たちが、彼女にささげている尊敬の程度を知ることができよう。

二七〇頁から成る本書は、つぎの八篇の獨立した論文から成つてゐる。すなわち、「ノルマン人の足かせ——クリストファー・ヒル (The Norman Yoke by Christopher Hill)」、二「生物學說における階級制から進化まで——S. H. メーソン (From Hierarchy to Evolution in the Theory of Biology by S. H. Mason)」、三「マルクス主義社會學へのスコットランド人の貢獻——ロナルド・J・マック (The Scottish Contribution to Marxist Sociology by Ronald L. Meek)」、四「ロンドン通信協會——ヘン・コリンズ (The London Corresponding Society by Henry Collins)」、五「一八四八年のキリスト教社會主義者——ジョン・サウエル (The Christian Socialists of 1848 by John Saville)」、六「主従法——デーヌ・シモン (Master and Servant by Daphne Simon)」、七「十九世紀イギリスにおける勞働貴族——E. J. ホブズバウム (The Labour Aristocracy in 19th Century Britain by E. J. Hobsbawm)」、八「ワーズワースと人民——V. G. キープナン (Wordsworth and the People by V. G. Kiernan) 以上である。

さきにも述べたように、これらはすべて力作であつて、まことに興味深い問題を提起しているのであるが、今これらの全部についてくわしく紹介を試みることはとても不可能なので、ここでは巻頭論文としてもつとも注目されるクリストファー・ヒルの論文をとりあ

げ、できるだけくわしく紹介してみたいと考える。というのは、ヒルのこの論文は、社會史や社會思想史にも關係する廣範な問題とありあつてゐるからである。

二

論文の題目は、「ノルマン人の足かせ」というのであるが、これは一體何を意味するか。ウィリアム征服王が一〇六六年にイギリスを支配する以前には、アングロ・サクソン人は自由で平等な生活をいとなんでいたが、ノルマン人の征服はこれに代るに專制的な支配と暴虐な政治をもたらししたのであつて、それ以來アングロ・サクソン人は、これらの失われた自由と權利とを、支配者から再び彼等の手にとりかえすべく、絶えざる闘争をつづけた。その結果、たとえば大憲章のような讓歩を支配者からかちとることができたといふのであつて、いわゆる「ノルマン・ヨークの理論」とは、いわば失われた權利の理論であるといふことができよう。失われた權利の理論、自由と平等とそして友愛が支配したのである原始社會に思いを馳せ、今やこれらの幸福と權利とがまつたく失われてしまつたと主張する思想は、ほとんどあらゆる社會に存在した。失樂園とか黄金時代とかもしくは桃源境とかいふ言葉は、しばしば人間による人間の搾取が発生する以前の社會を意味するものとして使われ、またそれは、人類の失われた幸福な社會にたいするはげしい憧れのひびきをさへともなつてゐる。こうして「ノルマン・ヨークの理論」はいろいろな近代的な思想のなかに姿をかえ形をかえて發展したのであつて、勞働者階級の運動にも影響をあたえたといわれる。ヒルは、

この論文において、この理論がどのような歴史的な經過をへて、革命的な思想のなかに生きつづけてきたかを、克明に描き出している。

「ノルマン・ヨークの理論」は、一〇六六年ウィリアム征服王の英國征服以來、長い歴史をもつているのだが、ヒルは中世紀についてはこれを省略し、十七世紀に至つて、十三世紀の終り頃に、アンドルー・ホーン (Andrew Horn) によつて書かれた論文、裁判官の鏡のなかにその理論が発見されたといわれる。注目すべきことは、これがフランス語で書かれたことであつて、支配者であるノルマン人の壓制にたいする抗議の論文が、大多數の英國人にとつて讀むことができなかったことである (十七頁)。だが、「ノルマン人の足かせ」にたいする反抗的な思想は無學な人々の間にも傳えられたが、十六世紀以前にはその證據はみられなかつた。だがその頃、十五世紀英國の中産階級の辯護人と呼ばれたジョン・フォートスキュー卿 (Sir John Fortescue) があらわれ、また同じ頃トーマス・スターキー (Thomas Starkey) によつて、ノルマン人の英國支配を非難攻撃したポール・ルベットとの對話が書かれた。これらの著作にあらわれた「ノルマン・ヨークの理論」は、主として、英國人の愛國的な熱情に訴えたものであつた。その頃また牧師のブラックウッド博士 (the Rev. Dr. Blackwood) は Apologia pro Regibus (1581) を書き、イギリス人民の地位をスペイン征服後のアマリカ・インディアンになぞらえたといわれている。

こうしてノルマン人の英國征服にたいする批判的な見解は、次第にはげしくなつたが、とりわけ古代研究家協會 (the Society of

Antiquaries) のジョン・セルデン (John Selden) とロバート・コットン卿 (Sir Robert Cotton) は彈壓され、セルデンはその著「十分の一税の歴史」(History of Tithes, 1618) を撤回しなければならなかつたし、またコットンは、ウィリアム征服王がアングロ・サクソン人を農奴制度より悪い状態におとし、彼等の習慣に従わせたと云つたために、コットンの有名な書齋は官憲におさえられたといわれる (二二頁)。それゆへ、一六四〇年以前においては、古代研究にたずさわることがはきわめて危険なものと考えられていた。たとえば、一六二七年、オランダ人アイザック・ドリスラウスは、タキトウスにかんする新しい歴史學の講義のため、ケンブリッジで講師をしていたが、その席を追われた。彼は「王權の基礎」を人民の自發的な屈服のなかに認め、オランダのスペインにたいする叛亂を讚美したからだといわれている。

十七世紀頃までに、「ノルマン・ヨークの理論」は、貴族的な特權をもたないすべての人々に訴えた。が、やがて資本主義的な芽生えとともにこの民主主義的な理論は、政府の封建的恣意的徵稅制度によつて、その財産を危くさせられた商人や地主たちにもつよく訴えたのである。「ノルマン人の足かせ」をたちきろうとする思想は、次第に愛國主義やプロテスタンティズムにも影響をあたえたといわれるが (二三頁)、しかしながら、革命的な民主主義思想の持主として、政治的舞臺にあらわれたもつとも進んだ一群の人々は平等論者であつて、ヘンリー・リルバーンはその代表的な人物であつた。彼ははじめ、マグナ・カルタはアングロ・サクソンの自由を具體化したものであるというエドワード・ヨーク卿の見解を支持していたが、

やがてマグナ・カルタも慣習法も、ともに彼等の自由を保證するものではないことを知った。またウィリアム・ウォルウィン (William Walsbyrn) は、一六四五年にリルバーンに、マグナ・カルタは人民の權利と自由のほんの一部にすぎないと語り、リルバーンやウォルウィンとともに平等論者であつたりチャード・オーヴァートン (Richard Overton) は、マグナ・カルタは「乞食の戴き物」 ("put a beggarly thing") にすぎないと云つた。その他、ジョン・ウォーレン (John Warr) やジョン・ヘア (John Hare) などは、ウィリアム征服王が法律をフランス語で書いたことを攻撃し、その結果、貧乏人は、だまされあざむかれ、法律の解釋は裁判官の自由にまかされていたというのである。

だがこうした平等論者のつきには、無産者のための代辯者ディック・ガーズ (Dick Gars) があらわれた。彼等は、封建的殘存物の徹底的な清掃を要求した。サミュエル・ハートリッパ (Samuel Hartopp) は、封建的な土地所有は、資本主義的な農業發展にたいする障害であることを指摘し、ノルマンの奴隷制度の標章であるこれらの制度は、國家の力によつて廢止されるべきだと主張した。ディック・ガーズと呼ばれたこれらの人々は、農業關係における急進的な改革を目標とした。彼等は、贖金保有所有權が廢止され、貧農の土地は封建的な義務から解放され、教會や皇帝から沒收した土地や未開地は、貧民にあたえられねばならぬとした。すなわち土地の私的所有に代えるに共同體的な耕作が、下からつみ上げられた自發的な連合によつて、平和のうちに確立されるべきであるというのであつた (三四—三六頁)。ディック・ガーズの目的は、ノーマン人の束縛をとりのぞくた

つた。なぜなら、ディフォーは、サクソン人をもつて、ノルマン人に劣らぬやばんな征服者であると云う。つまり移住民族が先住民族を壓迫し奴隷化した點では、サクソン人はノルマン人を非難することはできないからだというのである。だが、それならば「ノーマン・ヨークの理論」はその後象えてしまつたであらうか。それは、更に形をかえて新しい思想のなかに生きつづけた。

三

十八世紀の半ばに、「ノーマン・ヨークの理論」のブルジョア的見解が復活した。一七五七年ホークスベリ卿 (Lord Hawksbury) は、サクソン人が市民社會を建設する技術に長けていたと云い、またトーマス・ジェフソン (Thomas Jefferson) は、サクソン人の歴史を再發見して、彼等が政治的自由をもつていたことを確認した。だが、急進的な方面からのもつとも廣汎な研究は、一七七一年にあらわれた匿名の文書、「英國憲法にかんする歴史的評論」 (Historical Essay on the English Constitution) で、それによれば、サクソン人の憲法は、すでに紀元四五〇年にはじめられた。そして國家は、下から組み立てられた共同體の連合體であつたが、ついにアルフレッド大王の治世に、上下二院制の議會となり、それ以來一二〇〇年、年一回の議會の開會は、一六九四年の法律によつて改められるまで、サクソン人の享受した權利であつた。それはまことに、民主主義の典型であつたが、ノルマン人の征服はこれを破壊したとべられてゐる。「このときから世俗のおよび宗教的專制政治が行した、そのときまで英國には知られなかつた二つの悪魔が……」

けでなく、サクソン人の法律をとりかえずことであつた。ここに、バラダイスは、ノルマン人の勢力が打倒されたのち、はじめて地上に再び出現することができるというユートピア主義が彼等の胸に宿つてゐた。

以上のようにのべて、ヒルは革命的な時期において、四つの異つた社會階級の地位に應じて、ノルマン人の征服についての四つのはつきりした解釋をたどることができると考える。すなわち要約すれば、(A)ウィリアム征服王以來正當化された絶対主義の理論は、十七世紀の内亂の結果、消滅したと考えるもの、(B)慣習法は、アングロ・サクソンの自由の具體化であるとするコーク (Edward Coke) の解釋、(C)マグナ・カルタは、「乞食のほんの戴き物」と考えたブルジョア民主主義者の理論、(D)第四番目は、封建的土地所有の廢止を要求するもつとも急進的なディック・ガーズであつたが、第五番目にはもつともブルジョア的な主張があらわれた。一六六〇年以後、(C)および(D)の主張は勢力が衰え、とくに一六八八年の名譽革命以後は、ウィリアム征服王が壓迫者であつたかどうかは問題でなくなり、ウィリアムの征服説を嘲笑する者も出たのであつて、ディフォー (Daniel Defoe) の如きはその一人であつた。ディフォーによれば、「ウィリアムはブルジョアの王であり、ウィリアムの征服には危険はない」というのである。それはスチュアート朝の絶対主義に反對するコークの理論から發しているが、勝利しつつある議會派の人々の要求に制限されながら、急進的な攻撃にたいしてはみずからの地位をまもろうとした人々であつて、「ノーマン・ヨークの理論」は、むしろ空虚なものとして、ブルジョア的な見解に壓倒された感があ

と。そして更に、一六四九年のクロムウェルの革命によつて、人民は議會における權力を得たと主張したのである (四四頁)。

この匿名の評論は流行をきわめた。その影響をうけてマジョア・カートライト (Major Cartwright) は、「みずから選擇せよ」を著くにこれを利用して、また一七八〇年の立憲情報協會や更に、ロンドン通信協會にも影響をあたえたといわれる。そしてこの評論以來、英國史上、アルフレッド大王の役割が重視されるに至り、保民主主義者エドモンド・バーク (Edmund Burke) ですら、「われらの法律と憲法の建設者」としてほめたたえたといわれる。ジョン・スヘルマンは、「アルフレッド大王の生涯」という傳記を書いて、英國國家に本質と形式とをあたえたたとたえ、アッサー (Asser) やリチャード・ブラックモア (Sir Richard Blackmore) もまた傳記を書いたのである。それはまた、一七七六年、トム・ペインの「常識」 (Common Sense) にも影響をあたえたが、ペインが英國憲法の歴史的傳統を問題にしたとき、はからずもエドモンド・バークとの間に論争をまきおこした。この論争については省略するが、このペインの思想が、「ノーマン・ヨークの理論」の發展につくした役割は忘れられてはならない。

トーマス・ペインは、學術的な勞作はしなかつたが、彼の思想は財産をもたない人々をして行動にかりたてた。とくに産業革命の犠牲となつた小手工業者や、生活のより所を失つた農村の人々の間に熱烈な支持者を見出し、はげしい彈壓にもかかわらず、「人間の權利」は二十萬部も賣れ、ひろく讀まれた。ペインの思想は、ひろく一般大衆に影響をおよぼし、更にロンドン通信協會は大きな感化を

あたえられたが、しかしクリストファー・ウィヴィル(Christopher Wylie)のようなヨークシャーの改革者は、「プライス博士とイングラントの改革家の擁護」(Defence of Dr. Price and the Reformers in England)のなかでペインの思想を英國にとつては好ましくないものと考えた。こうして、ブルジョアの急進主義とならんで、ペインの庶民的な傳統は、色々な形で發展しつづけた。また労働者階級にたいして、大きな感化をあたえたものとして、スペンス主義者をあげなければならない。スペンス自身は、ノーマン・ヨークにふれてはいないけれども、彼の財産の起源についての見解は、「ノーマン・ヨークの理論」に類似している。

ノーマン・ヨークの理論、それはトム・ペインの革命的民主主義をへて、更にチャーティズムにも入りこみ、チャーチスト運動が衰えたのちは、急進的な労働者、自由思想家をして土地改革者の間に浸透していったと、ヒルは斷言する(六二頁)。そしてつぎのように結ぶ。「近代産業社會における労働階級運動の役割が、しつかりと把握されるやいなや、理想化された過去への懐古的な憧れは、現在から未來をつくり出そうとする行動の科學的な綱領に代つた。しかしながら、もし科學的な綱領でさえも、敵を『フランスの庶子とそこの山賊ども』と考えたそのように、創造的な精神が吹きこまれていなければ効果はないであろう」と。

クリストファー・ヒルは、この論文において、「ノーマン・ヨークの理論」を民主主義思想の流れのなかに、その發展と變形の交錯したものととらえている。これは、社會思想、政治思想史をして

労働運動史の深い理解の上に立つた大論文である。ヒルのこの論文が巻頭を飾っているのは、それが量質ともにくれてくるからである。この論文を讀んで啓蒙された者は、ひとり筆者のみではあるまい。(一九五六・七・一三) (飯田 鼎)

Е. Карнаухова: Ленинская Программа
В Первой Русской Революции
(Вопросы Экономки, No. 4, 1956, стр. 48—62.)

「農地改革」の歴史の意義が、「封建的」なるものの拂拭と「農民解放」をその變革の基本過程とする戦後日本の民主主義革命として評價された(「農地改革頭末概要」序、四頁)時期があつたが、最近では、「農地改革」は日本農業にかなりの變化を與えつつも、「封建的」なるものを決して拂拭しきることができなかったという評價が一般的に與えられている。何故「農地改革」が日本農業の封建的性格を拂拭しきることができなかったかについては、いろいろの理由があげられるであろうが、ここに紹介しようとするE・カルナウホヴァ女史の論文「第一次ロシア革命におけるレーニンの農業綱領」は、そのことについて大きな示唆を與えているように思われる。

この論文は五つの部分に分けて論じられているが、それぞれの部分には何らの「見出し」もなく雑然と論じているように見えるので、それぞれの部分の論點を私なりに要約して紹介することとする。

第一の部分においては、ポリシェヴィキの農業綱領の眞髓とその歴史の意義を明らかにするために、その綱領が作られた當時の經濟的政治的條件を考究することが肝要であることを強調して、資本主義的發展を阻害する農奴制が二十世紀初頭のロシア農業にどのようにに殘存していたかについて次のように書いている。

一八六一年の改革後、地主的及び分與地的土地所有が殘存し、三萬人の地主に七千萬デシヤチンの土地が屬し、そのうち六九九人の最も大きな土地貴族達は平均三萬デシヤチン(一デシヤチンは約一町一反)の土地をそれぞれ所有していた。これに對して一億五千萬の農民經營は、品質の悪い七千五百萬デシヤチンの土地を有していたにすぎない。農民は水飼場も牧場ももつていなかった。農民の土地は地主の土地に割込んでいたから、家畜が田畑を荒すことに對しては徵收によつて相應の所得が、放牧地の利用、土地不足の結果必然となる土地の賃貸借によつて安價な労働力が、地主に保證された。農民の分與地的土地所有は農奴經濟の構成部分であり、完全に農奴經濟に奉仕するための装置であつた。農民の土地は地主の土地の中に割込んでいて、細かく仕切られていた。この仕切りの綱は、農業における資本主義的發展の大きな障害であつた。この「仕切りを破る」第一の條件は農奴制の大土地私有の清算であつた。これが第一次ロシア革命における農業闘争の「中心」をなし、農民の土地闘争は、まず第一に地主の大土地私有を根絶するための闘争であつたのである。それ故にレーニンは、二十世紀初頭におけるロシア農

業の生産關係と階級的矛盾を特徴づけて、當時のロシア農村には二種類の階級矛盾、すなわち、農村労働者と農業企業家との間の矛盾、全農民と全地主階級との間の矛盾があり、前者の矛盾は發展し増大し、後者の矛盾は次第に弱まるものではあるが、それにも拘らずロシア社會民主黨にとつては後者の矛盾が最も本質的な且つ最も實踐的に重要な意味をもつていと述べたのである(стр. 49—50)。

二

第二の部分においては、ロシアにおけるブルジョア民主主義革命と労働同盟の問題をとりあつかひ、ブルジョア革命におけるプロレタリアートの指導性と農民の革命的 가능성을認めなかつたメニシェヴィキの誤りをレーニンを引用しつつ批判し(стр. 51)、ブルジョア「革命の進展と終結は労働階級が人民革命(народная революция)の指導者の役割を演ずるかどうにかかっている」(там же)ことを指摘する。

そして、マルクス・レーニンから引用しつつ、革命における農民の役割を明らかにし、労働同盟が如何に重要であり、農民に支持されない革命が歴史上如何に成功しなかつたかを指摘した後、「第一次ロシア革命におけるポリシェヴィキの農業綱領は、ブルジョア民主主義革命における同盟軍としての農民のためのプロレタリアートの闘争綱領である。農民に對する農業綱領のレーニン主義的命題の正しいことは、われわれの革命における労働階級の闘争の經驗に